

7 ポーフィリアの恋人

夜更け前 とうとう雨が降りだした
間もなく陰鬱な風が立ち
^{にれ}楡の木々をなぎ倒して吹き抜けて
湖面をひどく苛立たせた
僕は今にも砕けそうな心臓で耳をそばだてていた 5
ポーフィリアは音もなく入ってくると
冷たさと雨を締め出した
^{ひざまず} 跪き 消えかかった暖炉の火をおこし
僕の小さな家を温めた
そして立ち上がると 10
雨水の滴るマントとショールを脱ぎ
汚れた手袋をはずして
帽子をとり 濡れた髪を下ろした
ようやく僕の隣に座り 僕の名を呼んだ
僕が返事をしないでいると 15
ポーフィリアは僕の腕を自分の腰にまわし
白くなめらかな肩を露わにして
金色の髪を片側に寄せた
身を屈め 僕の頬をその肩に載せ
金色の髪で覆い 20
恋焦がれど と呟いた
ポーフィリアは意気地なし
プライドで自分の激情を閉じ込めて
プライドの束縛から逃れることもできず
ずっとその身を僕に投げ出すことができずにいた 25
けれども情熱が勝ることだってある
今宵の華やかな宴の^{さなか}最中に
突然こんな僕のことを思い出したのだ
ポーフィリアを想って恋患いの僕のことを
だから嵐の中ポーフィリアはやってきた 30
僕はポーフィリアの瞳を見上げた
その瞳には幸せとプライドとが映っていた
ポーフィリアは本当は僕を慕っているのだ
何をすべきか考えている間も^まずっと

驚きが僕の心に広がった 35
この瞬間ポーフィリアは僕だけのもの
綺麗で無垢で善良なポーフィリア
僕はすべきことを思いついた
その金色の長い髪を一つに束ね
ポーフィリアの細い首に三度巻きつけて 40
そして絞めた ポーフィリアは苦しまなかった
きっと苦しまなかったはずだ
中に蜂を宿した 蕾^{つぼみ}を開くように
僕はポーフィリアの瞼をそっと開いた
汚れ^{けが}の無い青い瞳が笑っていた 45
それから首に巻きつけた髪^{ほど}を解いた
僕の熱い口づけでポーフィリアは
もう一度頬を赤らめた
僕はポーフィリアの頭を起こした
今度はその頭を僕の肩に載せた 50
ポーフィリアは項^{うなだ}垂れたまま動かなかった
愛しい薔薇色の笑顔が
一番に望むものを手に入れてとても嬉しそう
軽蔑していたものすべてが消え去り
代わりに愛する僕を手に入れたのだ 55
ポーフィリアの恋人 ポーフィリアの唯一の望みが
どんなふうに叶うか思いもよらなかったはず
こうして今僕たちは一緒にいる
一晩中じっと待っている
神の祝福の声は まだ聞こえてこない

(福山真季・原由子寄稿)